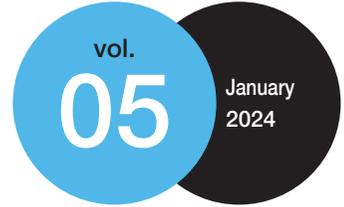


みんなで考える、子どもの未来

あかつき 道徳 TIME



学校におけるいじめの認知件数は年々増加の一途をたどっており、その深刻化が叫ばれている。さまざまな問題が渦巻く現代社会において、子どもの心の中では一体何が起きているのか。また、いじめから子どもを守るために、学校が、そして道徳ができることは何なのか。生徒指導の専門家や道徳教育のプロに、お話をうかがいます。

いじめから子どもを守るために 私たちが今、できること



金網知征

(香川大学教授)

英国ロンドン大学大学院博士課程を修了し、香川大学准教授の後、現職。香川県いじめ問題対策連絡協議会会長、香川県いじめ問題再調査委員会委員。専門は発達社会心理学や児童生徒のいじめ問題に関する実態解明と防止のための実践支援など。

七條正典

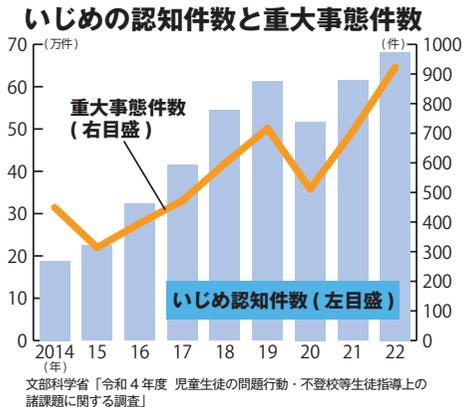
(香川大学名誉教授
・元文部科学省教科調査官)

香川県公立小学校、香川大学教育学部附属高松小学校教員、鳴門教育大学助教授等を経て、平成8年度から文部省初等中等教育局中学校課・高等学校課教科調査官。香川大学教授、高松大学教授等を歴任し、令和5年度より現職。日本道徳教育学会・日本生徒指導学会副会長。

**いじめの認知件数が
増え続ける背景には**

金網 学校現場におけるいじめの認知件数が令和四年度に約六十八万件を超え過去最多となりました。増加の背景として、いじめ防止対策推進法の制定・施行からちょうど十年経ち、法に基づくいじめの定義やいじめの積極的認知に対する理解が学校現場において広がっていること、また、「いじめ発見シート」や「いじめチェックシート」などのいわゆる早期発見・未然防止のためのツールの活用が進んでいることなどがあります。このように、学校現場でいじめの積極的認知が進んだことによる件数の増加という意味では、この傾向は決して否定的なものではありません。ただ一方で、火のないところに煙は立たないと言いますか、そもそも存在しないいじめを認知することはできないので、六十八万件という件数は単純に学校の努力の成果として肯定的のみとらえることはできないと思います。

七條 二〇一五年以降、いわゆる重大事態の発生件数は、いじめの認知件数自体が減少したコロナ禍の二〇二〇年を除いて増え続けています。



つまり、いじめの現状について言えば、依然として大きな課題を抱えていると言えます。いじめが減らない原因として、核家族化が進んで人間関係をうまく築くことができない子どもが増えてきたことは以前から言われています。また、対面の関係性が希薄化した一方で、インターネット上での関係性は過密化し、SNSでの誹謗中傷などの「ネットいじめ」の認知件数が増えたのも要因の一つでしょう。

金網 ネットいじめは、子どもだけでなく、大人の問題でもあります。コロナ禍には、子どもたちのみならず私たち大人も含めて、社会全体がさまざまな不安に見舞われていました。未知のウイルスへの恐怖はもとより、

感染してしまった際に周りからどのような目で見られるのかといったことも、大きな不安につながりました。そんな社会全体の不安が、ネット上での誹謗中傷の増加という形で表に出てきてしまったのだと考えます。そして、そうした大人社会のひずみを子どもたちも目にしてしまうことで、子どもたちの間でも同様のことが起こってしまったのではないのでしょうか。SNS上のトラブル以外にも、オンラインゲームでの採め事や児童ポルノ案件なども増えていきます。これらは顕在化しにくいという問題点があります。

安全・安心な風土づくりを学校全体で行う

七條 いじめ問題に対して学校ができること、するべきことは多くありますが、二〇二二年十二月に改訂された『生徒指導提要』の中で、教育の視点の一つとして「発達支持的生徒指導」が挙げられています。いじめを早期に発見し、適切な教師の指導・支援によっていじめを子どもたちの発達を促す大切な教育の機会としてとらえることが求められています。また、今回の改訂では、生徒指導上留意すべき視点の中に「安全・



安心な風土の醸成」が加えられました。いじめを生まない、許さない土壌づくりもまた求められています。

金網 国立教育政策研究所による追跡調査では、八割近い子どもが義務教育段階のどこかで、被害側あるいは加害側の立場でいじめに関わることが明らかになっています。いじめをまったく経験しないという子どもは実は非常に少ないのです。そんな中で、「いじめは絶対に許されない」、「いじめを見たら勇気を出して声をあげよう」などの言説は、それ自体は正論ではあります。子どもたちにとつては「絶対に許されない行為をすでに

犯してしまった」という場合も少なくないわけです。いじめをした子を告発するという一方的な発想だとかなかなか行動に移すのは難しいと思いますが、お互いに「許し合う」「理解し合う」という発想で、学級全体でいじめに対する否定的な規範を醸成していくことが重要ではないでしょうか。

七條 そして何よりも、子どもたちを育てようとする前に、我々大人社会全体のモラルの低下を問いただす必要があるという指摘がなされていることを謙虚に考える必要があると思います。そんな社会の中で、大人が「それはだめ」と子どもに言っても、現実からかけ離れたものとなり子どもには伝わらないでしょう。「見て見ぬふり」(傍観者)ではなく、自分には何ができるかを考え、自らの生き方に反映できるように授業にしていくことが求められています。

道徳授業で「本当の理解」へ

七條 道徳科で重要なことは、いじめと深く関わる内容項目について、指導の充実をしっかりと図ることです。「公正、公平、社会正義」「自主、自律、自由と責任」「思いやり、感謝」「相互理解、寛容」などの内容項目

について計画的に指導していかなければなりません。道徳の教材では、『卒業文集最後の二行』（公正、公平、社会正義）のようにいじめを直接的に扱ったものがいくつかあります。

これらはいじめ防止に直接的につながる考え方を育む教材です。ただし、いじめを直接扱っているため、クラスの中にいじめが存在した場合、特に加害者や被害者に十分配慮した指導が望まれます。事前のアンケートで個々の子どもの状況を十分把握し、うえで授業に臨んだり、個別指導を行ったりする必要があります。また一方で、いじめを直接的に描いてはいないものの、いじめを生まない温かい学級風土を醸成するうえで有効な教材もあります。例えば『旗』『思いやり、感謝』や『一枚の写真』（よりよい学校生活、集団生活の充実）などです。このような教材を使った授業を通して、プラスの人間関係を子どもたちに学ばせることも、道徳教材に期待できることです。

金網 そうですね。いじめを扱った授業で重要なのは、「なぜそもそもいじめは許されないのか？」についての理解だと思えます。単に「ルール違反だから」「先生に怒られるから」

という、いわゆる賞罰レベルの理由だけでなく、対象とされた子に対して、さらには周囲でそれを目撃した子に対してどのような影響を与え得るのかというところまで、さまざまに立場に立って理解を深めることで初めて、なぜいじめが許されないのかの本当の理解につながるのではないのでしょうか。早期に止めることができるか、あるいは見逃されて深刻化してしまうのかは、周囲の子どもたちの態度や行動に大きく関わるものであり、傍観者をいかにして仲裁者や相談者になるかがいじめ防止の重要な鍵になると思います。傍観者が行動を起こすことがなぜ難しい



のか、何が障壁となっているのか、学級がどのような状態になったら動くようになるのかといったことを考えさせるような授業が望まれます。そのためには、実際のいじめ場面を再現した視聴覚教材の活用や、いじめ場面のシナリオを考えて立場を変えながら演じてみるロールプレイなどの体験的活動も有効です。いじめた側の経験をもつ子どもたちにとっては自身の行いについて振り返る機会となるような、またいじめられた側の経験をもつ子どもたちにとってはなぜ自分たちをいじめた子はそれをしたのかを考える機会となるような、そしてそこで感じたことを安心して発言できるように、そんな授業になつていくとよいと思います。子どもたちがお互いに尊重し合える風土をつくっていくことが欠かせないですね。

教師の目が曇らないために

金網 絶対に忘れてほしくないこととして、いじめ問題は命の問題なんだということ。いじめを許さない心を育てるといことは、子どもたちと共に命と向き合うことです。いじめが原因で命を落とした子どもが世界中にいます。周囲の仲間たち

がそうならないために何ができるかを、子どもだけでなく大人も共に考えていかなければなりません。

七條 命を絶たなかったとしても、学校に来ることができなくなればその子の人生を大きく変えてしまい、社会的生命を奪うことになってしまいます。このことも忘れてはいけません。そして、何より重要なことは、いじめは人権侵害であるという視点を忘れず、「いじめを絶対に許さない」という毅然とした姿勢を教師がもつことです。教師が「いじめは昔からあるものだ」など、いじめを許容するような姿勢でいたら、その目は曇ってしまいます。

金網 おっしゃる通りです。仮に学校での取り組みによって九割のいじめが解消されたとしても、たった一件でもいじめがあれば、その一件が取り返しのない事態になってしまふことがあり得るのです。決して軽く考えてはいけません。

七條 教師が一人で抱え込まないことも大切です。「チーム学校」は、いじめ問題を防止するうえで、道徳教育においても重要なキーワードです。先生一人一人の特性を生かしながら互いに支え合う指導体制、研修体制をつくっていったほうがいいと感じています。

「共感」し、「展望」をもって いじめを生まない学級へ



和田雅博

(兵庫教育大学附属中学校教諭・研究主任)

平成 19 年度より大阪府公立中学校教諭を務め、平成 29 年度より道徳教育推進教師となる。令和 3 年度より現職。

生徒同士が本音で語り合える 環境づくりを

いじめを生まない学級をつくるために私が最も大切に行っているのは、生徒が自分の意見を本音で語れる環境をつくることです。教室の中でも、ともするといじめにつながり得る課題が見られることがあるのではないのでしょうか。例えば、生徒が自分らしい表現をできなかったり、思わず自分の意見を取り下げてしまったり、一人ぼっちになっていたり……。そういった課題を解決し、いじめを未然防止していくためにも、生徒同士が本音で語り合い、それを受け止め合うことができるような、安心できる雰囲気をつくるのが大事です。そして、道徳の授業はそのための大きな鍵となると思っています。

生徒に共感しないと 道徳授業は進まない

道徳の授業では、価値について生徒が自らの体験や考えをオープンに話すので、それを話すことができる環境が授業の中にあることが、ひいては日常と地続きになっていき、授

業以外の場でも本音で語り合うことができるようになっていくと考えます。

では、どのように道徳授業の中で本音で語れる環境を実現していくか。最も大事なものは、教師が生徒の考えていることを受け取り、共感しようとするのだと思います。私の授業では、一人の意見に対して「それってどういうこと?」「そこ、もう少し詳しく聞かせて」と丁寧に聞いていきます。その生徒が自分の思いの核となる部分を本音に言語化できているかを意識しながら追発問すること、言語化できていない部分をとことん掘り下げていくようにしています。授業中、私は黒板の前で止まっている時間が長いのですが、それは私自身も生徒と一緒に考え、悩むことが多いからです。そうすることで生徒の思いがけない発言に心が動かされるのがたくさんあります。

道徳的価値についての 三年後の展望をもとう

いじめのない学級づくりのためにもう一つ大切にしていることは、それぞれの道徳的価値について生徒の

三年後の展望をもち、それに向かって真つすぐ進んでいくということ。どの道徳的価値にも「相手を尊重する」「自分を大切にする」といった、いじめを許さない心につながる部分があると思います。そういった価値のよい部分を考えながら、卒業時に生徒たちがどのような姿になってほしいか思い描くことが、いじめをなくすことにもつながっていくと信じています。

例えば、「自主、自律、自由と責任」という内容項目については、「こんなふうになりたい、挑戦したい」という欲求とそれを制御する理性とのバランスをとれるようになっていくのが一つのゴールだと考えています。そのために、一年生ではまず欲求の部分が芽吹き、二年生では欲求がさらに強くなる一方で理性が芽生え、三年生になると客観的に自分を見られるようになり、欲求と理性のバランスを取ることができるようになっていく……というように思い描きます。その展望をもって授業に臨むことで、一回一回の道徳授業が、そしてクラスが進む方向が見えてくるのです。